

10. ボランティアの活動拠点機能を持つ生涯住宅の建設活動

ライフケア研究会
(兵庫県神戸市)

I. 参加メンバー

神戸ライフケア協会、(株)タピス、関西大学馬場昌子氏、建築家で構成しています。

神戸ライフケア協会は、1982年から活動している団体でスタッフ50名、登録ボランティア800名で、高齢者のためのホームヘルプサービスや、痴呆高齢者のためのデイケアサービスや、各種福祉施設の研究とその広報等を行っています。活動の特徴は有償ボランティアであり、自らボランティアをした時間を蓄えられるという時間貯蓄制度です。

(株)タピスは、福祉住宅の建設販売をしているハウジング会社で、福祉機器の販売等も行ってきます、因みに社長は、社会福祉法人の理事長も務めています。

II. 活動の経過

生涯住宅建設の発端は、神戸ライフケア協会のデイケアセンターの使用期限が迫っていたことと、(株)タピスが新しく生涯住宅のモデルハウス建設計画を立てたことによります。この計画は読売、神戸、朝日、毎日の各紙に取り上げられました。

西宮市にある民間のケア付アパート「小さな木の家」を見学したり、大阪ガスの研究部及び京都大学の高田研究室の調査・ヒアリングを受けました。

神戸ライフケア協会の主催した、突撃ルポライター山井和則氏を迎えての市民向け講演会に協力しました。これは、(財)こうべ市民福祉振興協会の「市民ふくし」No. 56号に載りました。

1994年10月には、生涯住宅の建設地が決まり、1995年5月設計完了、12月竣工という予定で活動していましたが、1995年1月17日の兵庫県南部地震により建設地の所有者が被災し、計画はストップしてしまいました。

1995年に予定していた福祉機器の現地検証と新たな提案という研究課題も中止せざるを得なくなりました。



「小さな木の家」の見学

III. 計画の概要

建設地は、神戸市東灘区の既成市街地の中で便利であり、ノーマリゼーションの実現という点からも良い所でした。

規模は、木造3階建、延床面積250㎡です。用途は、1階を神戸ライフケア協会のデイケアセンターとして、2・3階を土地所有者の住宅として使い、全体を(株)タピスが生涯住宅のモデルハウスとして使い、その代わり(株)タピスが建設費を負担するという計画でした。



山井和則氏の講演会

設計主旨は、まず長寿社会対応型の構造・設備とします。建て替えなくても内外装の大規模なリフォームができ、設備もそれに対応可能なように階高に余裕を持たせます。そうするとライフステージの変化に合わせて、間取り等も変えることができます。

次に、アクセスフリーという概念で設計します。身体の老化・変化が起こっても、住宅内及び外部への移動の自由を保証しようというものです。例えば、廊下・階段幅を充分確保しておいたり、将来のエレベーター設置用のスペース・設備を用意しておいたり、手摺設置用の壁下地を作っておいたり、ドア幅や引戸の採用等に注意します。

安全性を追求します。例えば階段は登りやすい勾配とし、階下まで転倒しないよう折返し階段とし、段鼻を衝撃性の小さく弱視者によく見える色とする等です。火災に対しては、住宅用スプリンクラーを検討します。尖った角をなくしたり、床の仕上げ材の違いによる転倒防止に配慮する等細部に注意します。

快適性を追求します。上下階の遮音性を高める構造としたり、浴室の床タイルの冷たさへの配慮等健康快適住宅とします。



当初の計画地

以上は計画の一般論としてですが、建設地の決定が予定より遅れましたが1994年12月に決まった段階で、その建設地と所有者の家族のための計画という、言わば特殊解の検討と、それに並行して進める予定であった研究が、震災により中断のやむなきに至ったのは既に述べたとおりです。

IV. 計画の意義

長寿社会対応住宅・ノーマリゼーションの実現。ボランティア団体とハウジング会社という民間団体・組織が以上の概念の住宅・施設を構築し実現するのはそう多くは見られない例と思われます。

竣工後の研究者による設計の効果測定。これにより、現在における福祉設計思想の点検・深化が期待されます。

V. 今後

震災により計画が中断してしまいましたが、その後研究会ではもう一度土地探しから再開しようということを決め、現在活動を始めています。

任意のボランティア団体への法人格授与ということが、国会レベルで取り沙汰されていますが、社会のスムーズな運営のために、民間の多くの非営利法人組織を育成していくというこれからの時代の風潮に乗っていくことが、神戸ライフケア協会に求められていると言えるかもしれません。